２０２４年０１月１８日 読売東京 朝刊 都民２ １３Ｓ版 ２６頁

小金井桜見物 紀行文に

文人の武蔵野

佐藤一斎

江戸時代後期の文化文政時代は、浮世絵や歌舞伎、川柳などの全盛期であり、また学問の権威が確立した時期でした。その中心にあったのが幕府直轄の昌平坂学問所です。学問所は、武士が支配階層であり続けるために、実力を身につけるべく学問をおさめる教育施設でした。

文化3年（1806年）、学問所の大学頭だった林述斎（1768～1841年）は、門弟の佐藤一斎（1772～1859年）に声をかけ、観桜のために小金井橋まで赴きました。

2月28日の夜が明ける頃、一行は灯火を手にして湯島の学問所を出発しました。長雨のため足元がぬかるんでいたので、辺りが白むまでは、門弟たちが述斎を駕籠に乗せて歩みを進めました。四谷御門、淀橋、高円寺、吉祥寺、井頭池を経て小金井に向かいました。師弟による小金井橋における桜見物は一日かけた移動であり、一種の「旅」でした。

湯島聖堂。かつて昌平坂学問所があった（文京区で）

一斎は、後に述斎の後継者になる人物です。数多い門弟たちの中でも、当時から一番弟子だったのでしょう。述斎の命により旅の記録を起筆します。帰宅した翌日の29日に脱稿するはずでしたが、疲労困憊したため、書き終えるのが1日遅れ、30日となったようです。一斎は述斎に遅延を詫びる書簡を認め、それから1日かけて「小金井橋観桜記」を完成させます。

「小金井橋観桜記」は、漢文体で書かれた紀行文です。漢文学者の今浜通隆氏が、5本の論考（「佐藤一斎作『小金井橋観桜記』について―近世漢詩文のなかの武蔵野―」〈上〉〈中〉〈下之一〉〈下之二〉〈下之三〉）を通じて、「小金井橋観桜記」全文の原文を掲げて訓読を施し、詳細な注解を記しています。

ここからは、今浜論文をたよりに、当時の「小金井橋観桜記」がどのように受けとめられ、どのように伝えられたのかを確認していきたいと思います。今浜氏は、一斎の「躍動感溢れる雄渾な筆致」とその文学性によって、江戸御府内の文人・詩人に注目されるに至り、「小金井橋」に桜見物に訪れる人々の数を増大させたと述べています。

（武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍）

＊

過去の連載は、読売新聞オンラインでお読みいただけます。スマートフォンはQRコードから。